



6月15日
第1回

学習会を開催

～学習テーマ～

「エッセンシャルワーカーが抱える課題と 2024 年問題」

大牟田の現地実行委員会は、11月の九州セミナーの本大会開催に向けて動きはじめています。その第1弾企画として、6月15日（土）に、本大会のテーマでもある『エッセンシャルワーカー』について、シンポジウムを開催しました。医療、建設業、運輸業、教育の4業種（エッセンシャルワーカー）よりシンピジストを招き、コーディネーターを副実行委員長である杉垣朋子弁護士にお願いして「エッセンシャルワーカーが抱える課題と 2024 年問題」というテーマで議論を深めました。

学習会には、60名を超える参加者が集まり、エッセンシャルワーカーの働き方改革や現場での課題・現場が抱える苦悩などについて学び合いました。学習会の一部をご紹介します。



【コーディネーター】
不知火法律合同事務所
杉垣朋子 弁護士



【シンピジスト】
社会医療法人 親仁会
後藤康平 医師

2024年度から、医師の働き改革がスタートしました。しかし、何か変わったかという何となくは変わりません。「医師の働き方改革」に関する厚生労働省の動画を見ると、医師労働の軽減のために、患者や家族に負担をお願いする内容となっています。確かに、診療時間を短くする方法によって、医師の勤務時間は減少させることができるかもしれませんが、しかし一方で、患者や家族にとっては、必要な時に受診ができなくなる、急病時や時間外での受診をためらってしまうなど、不利益となるため正しいやり方とは言えません。

タスクシフト・タスクシェアについても、医療ではすべての職種が忙しい状況にあり、全体の仕事量が減るわけではなく、負担が他の職種に映るだけであり、根本的な解決とはなりません。

医療現場も家族も既に努力はしています。医師や医療現場の過密・長時間労働の根本は人員不足です。解決するためには、OECDと比較して圧倒的に少ない、人口当たりの医師の数を、OECD平均まで増やすことです。

建設業界には、全国にいる約330万人の職人のうち100万人が「一人親方」だと言われています。建設業界は、重層下請け構造の中で雇用という働き方が少ない状況です。賃金については、職人の多くが「日給月給」であり、休日が増えると収入が減ります。また、賃金額では、建設業の職人は平均342万円、一人親方でも403万円と、賃金労働者の平均年収457万円を大きく下回っています。さらに、年齢に応じて賃金が上昇するという業界ではないこともあり、労働者は「1日でも多く働きたい」というのが本音です。休みは日曜日だけ、というのが普通です。

2024年から、社会保険の加入が推進され、元請けが社会保険の事業所負担分を負担するように求められていますがほとんど守られていません。

また、今回の制度は国が現場の実情を全く理解していません。ほとんどが零細企業である建設事業所において、労務管理や賃金計算をする余裕は親方にはありません。そして、建設労働者の労働時間を減らし（週休2日）、労働者の生活を守るためには単価を1.2倍にしなければなりません、元請けや上位企業は負担をしようとはしていません。



【シンピジスト】
福岡県建設労働組合
大牟田支部
中嶋了 書記長



【シンポジスト】
全日本建設交通一般
労働組合 福岡県本部
緒方秀樹 さん

はじめに、報道で国民に間違った理解がされているので、はじめに言いますが、運輸業界における、今回の働き方改革「制度改正」での問題は、「市民に荷物が届かなくなる」ということではありません。

運輸業界では、規制緩和が行われたことで、多くの企業が参入してきました。そして競争の中で「運賃のダンピング」が加速しました。運賃のダンピングは労働者の賃金に跳ね返り、運輸関連労働者は、低賃金・長時間労働が普通となりました。そのような中で健康被害の発生が続いたこともあり、今回、時間外労働の上限規制が導入されることとなりました。しかし、低い基本給と距離・時間などから割り出される手当で賃金が構成される運輸労働者は、生活給を稼ぐために、「長時間働きたい」と考えます。また、国は労働時間の削減分を距離で補うため制限速度上限をあげました。これでは、安全な運行はできません。

運輸業界における労働者の安全や健康を守るために必要なことは、労働時間を短縮しつつも、運賃を適正価格にすること、そして低すぎる賃金を改善させることです。

今、教育（学校）の現場では、先生の超過勤務・休日出勤・連続勤務は常態化しています。理由は、子ども・保護者との関り（多様性をもつ子どもの受入れ、保護者からの要求や保護者間のトラブル仲裁など）、次に、仕事の内容が増加している（外国語授業の導入、ICTの推進、部活動、学級通信）、そしていらぬものを削れない（学力テストの分析・評価、集金業務、どうしてもいい出張など）があるからです。残業時間のアンケートにおいて、月45時間以上という回答は、小学校64.5%、中学校77.1%にもなります。

私自身は、教師の仕事についてやりがいもあり、素晴らしい仕事だと思っていますが、やはり心身への負担はとても大きいものです。今のような状況が続くと、身体もこころも壊しかねません。また、私たちをみて、子どもたちは「先生になりたい」とは思わないでしょう。

教育現場における働き方改革は、教師の業務整理と業務削減を図ること。また時間外労働を正確に把握するために時間と賃金をリンクさせることも重要です。そして何よりも、教員定数を増やすことが、先生にも子どもたちにとっても大切です。



【シンポジスト】
福岡県教職員
労働組合
北口徹一 執行委員長



【代表世話人 議長】
田村昭彦 先生

シンポジウム後は、「九州セミナーin 大牟田 現地実行委員会を参加者全員で開催しました。実行委員会では、これまでの事務局会議における議論の到達や11月の本大会に向けてのスケジュール、そして本大会のテーマなどについて共有をしました。また、第2回現地実行委員会学習会（8月3日 中央公民館 研修室A テーマ「エッセンシャルワーカーのジェンダー問題」）を案内しました。

最後に、田村昭彦先生（九州セミナー代表世話人 議長）より閉会の挨拶を受け、第1回学習会と実行委員会を終了しました。

◆◆◆参加者からの感想（アンケートより一部抜粋）◆◆◆

- エッセンシャルワーカーの処遇の悪さに改めて気づかされた。労働条件・賃金の改善を国は考えるべき。
- どの業界（業種）でも、人員不足が大きな問題だと感じた。
- 制度だけをつくって、あとは現場任せにする国の態度は間違っている。労働者の健康や生活を守るために責任を持つべきである。
- エッセンシャルワーカーが抱える課題に対するアプローチのきっかけとなる学習会でした。11月の本大会に向けたよい学習会でした。
- どの業界も2024年問題にぶつかり大変だということが分かった。解決方法をみんなで考えていきたい。